昔話の扉をひらく3「姥捨山」

――「幸せな姥捨山伝承」より――

藤井佐美

年老いた親を捨てる慣習の昔話があります。ここでは、「姥捨山」の伝承世界をあらすじや身近な話からご紹介します。なお、後半に解説する「伝承世界」の内容はエッセイ誌「R」№99からの転載であり、後日寄せられた読者感想文とあわせてご紹介しておきます。

あらすじ

1、老人を山に捨てる慣習にそむき、縁の下に隠す。
2、隣国からの難題を老人の知恵で解決する。
3、以後、その慣習は廃止される。（難題型）
※日本の昔話「姥捨山」はおよそ以下の四つに分類されます。

枝折り型（息子の下山の道標を作る母）
畚（もっこ）型（籠を持ち帰ろうとする孫）
難題型（老人の知恵は宝）
福運型（捨てられた山で鬼から打出小槌を入手）

身近な話

広島県豊田郡豊町久比（枝折り型＋難題型）

むかし、孝行息子がおりまして、年寄りの母親をうば捨て山へ負うて行きょうりました。そしたら母親は、木の枝をポキポキ折っては捨て、折っては捨てしょうる。息子が、
「お母さん、どうしてそんなに枝を折って捨てるんか」言うたら、

「おまえが帰る道がわからんようになるけに、ほいで折って捨ちょんじゃ」いうてからに息子に言いましたんです。そしたら息子が、
「こんなにわしのことを心配してくれる親をなんで捨てらりょうか」言うて、連れて帰って家へかくしとりましたん。
　そしたら、ある日、殿様から、「灰縄（はいなわ）を出せえ」いうてきたんです。だれも灰縄の作り方を知らんけに、かくしとる母親に聞いたら、「縄を百尋（ももひろ）ほどのうて、火を付けて灰にして持っていけえ」いうて教えてくれた。ほいで、それを持っていって、殿様からほうびをもろうた。そしたらまた、殿様から、
「たたかん太鼓に鳴る太鼓を持ってこい」いうおふれがあったんです。村の人が寄って相談したけんど、だれもそういうものはようこさえんいう。ほいで、また母親に聞いたら、
「そりゃあ太鼓の中へ蜂を入れとけえ。そうすりゃあひとりでに鳴るけに」いうて教えてくれたので、それを持っていって、またほうびをもろうた。つぎは、
「かしの棒のどっちが先か根元を見分けえ」いう問題が出たんです。これも母親に聞いたら、
「その見分けは、水にかしたら（浸したら）根元のほうがどうしてもよう沈むからわかる」いうて教えてくれた。
　こうして三つの難題をみなその孝行息子が解いたもんじゃから、殿様が、
「おまえ、誰に聞いたか」言われた。
「実は、年とったお母さんに教えてもろうたんです」いうて答えた。
　それからは、年寄りいうもなあ大事なもんじゃいうので、「うば捨て山」というもなあないなったそうです。
　それでとんとひと昔。

広島県広島市「爺捨山」（枝折り型＋難題型）

　昔、与作言ふ親孝行者（もん）が居った。其の頃の風で年寄りは山に捨てることになっとった。或る日与作も年取った父親を捨てに山に出かけて、父親を山へおいて帰ろうと思うたが、自分の来た道が分からんで困っとると、捨てた父親が「与作や与作や、儂も年をとって捨てられるんで仕方がない、今お前が来た道にゃァ樹の枝が折ってあるけんそ

れを目当てに帰るがえゝ」言はれた。与作は父親を捨てかねて、又父親を連れて戻って、家の下へ穴を掘って父親を其処へ入れておいて孝行をした。

ところが或る時、隣の国の殿様から其の国に難題が出て、それをよう解かんと攻め寄せる言うて来た。隣の国は大きようて強い国ぢゃった。難題と言ふのは『灰で縄をなえ』ともう一つは『此の木はどっちが根元で、どっちが先か』言ふのぢゃった。其の国の殿さんは大層困って、此の二つの難題を解いたもんはどんな望みもかなへてやる、と言ふお触れを出された。此の事を聞いた与作が、穴ん中に居る父親に此の話をすると、年寄りの父親は「これほど容易(みやす)い問ひはない。縄を塩水につけて乾して焼けばなうた縄が出来るし、木は川へ流すと根元の方から流れる」言うた。与作が早速父親から聞いた通りを殿さんへ差し出して、其の国は助かった。殿さんは喜んで、与作に望みのものを言へ言はれた。与作は「年寄りを捨てることを御許し下され」と頼んだんで、それからは年寄りを捨てんやうになった。

※参考資料編者　磯貝勇の補注（畚型）

所謂「棄老譚」である。私の亡くなった祖母から聞いたものゝ記憶であるが、此の話は又与作が何故父親を連れ帰ったかに就て、連れて行った与作の息子が、与作が父親を容れて行った籠を捨てやうとした時「お父(とっ)つあん、其の籠を持って去(い)のうや、あんたが年をとったら又其の籠へ容れて捨てに来にゃァならんけん」言うたと話されてゐた。

広島県加計町杉ノ泊（枝折り型＋難題型）

殿様がなんだけなあ。ある事態(時代カ)に年寄りはみな捨ててしまうだったげな。そんで、ある日、婆(ばば)さんが年寄りて、負うて山へ捨てていうたげな。木を切ってせなをおわれてって奥へ行くのに木を折っとく。息子が、

「なしてあんた。木を折っとくか」

いうたら

「まあ、何よ。向こうへ連れてってくれた時に聞かそうよ。それまでは黙っとる」

といって、道がわからんけん、こういう所へ行った時に、木を折っておいたから、目印にいんだげな。そんでもう、親というものはこれほどありが

てえものかというて、おいておる気にならんけえ、おうんける。ところが、殿様にいけんで、床の下に掘って隠しときおったげな。そしたら、あるときに殿様が
「あいぇんで、縄をのうて持って来い」
いうて、お母さんに相談したけなら
「ありゃ、灰じゃ、縄なわれんけえ、縄のうてその縄を焼いてみい、そうすると灰になっとるけえ」
もっとったげな。
「こりゃどがいしてのうたげな」
というて、ありゃ、こげいなるこえしかたないけん。床の下へ隠して、あの毎日かくして食べよります。母が教えてくれたかな、縄をのうて焼けというて。そんじゃけえ、年寄りというものは、ええ考いするもんじゃ。捨てたんじゃいけん。年寄りはみな、捨てんこうになったげな。

広島県神石郡豊松村１（畚型）

むかし。むかしの話じゃがぁ。姨捨山いうのがあった。もう、年ぅひろうたおばあさん、おじいさんは、どうにもならん。もう年寄は、姥捨山いうのぃ捨てよったいう。

むかし、ある家の年寄が捨てられることになって、年寄の孫と子どもが年寄を担あで姨捨山ぃ捨てに行った。ところが、年寄ぅ置いて、捨てて帰ろうと思うたら、孫が担あで来た棒を、また担あでもどるけえ、年寄の子どもが、
「そりゃあ、置いとかにゃあいけん。そりゃあ、持って帰るもんじゃあない」
いうて、父親が、その子に、年寄の孫に言うたんです。
「へえでも、お父さんを、また担あで来るのに、この棒は要るけえ」
いうて、言うたけえ、
「せえじゃあ、いけんけえ」
いうて、また年寄を、
「また、おばあさん、担あで去のうやあ」
いうて、せえから、姨捨山へ持って行くのを止めたげな。
ひとむかしこっぽり

広島県神石郡豊松村２（難題型）

むかし。年寄は、皆、姨捨山ぃ捨てられたいう。それでも、捨てに行ったけれど捨てられずに、姨

捨山から息子が担あでもどったぁ。そしてこっそり、連れてもどって、生かしていたんじゃそうな。

ある日、そのおかみ（殿様）へ難題が来たんじゃそうな。その難題いうのは、

「小さい、この真ん丸い七曲がりの水晶の玉の穴へ糸を通せ」

いうんじゃそうな。それをせんようなら、そのお殿様の国が立たんたら、どうたらいうて、へえでまあ、難題を解かにゃあならん。

その人は、家に帰って、その話ぅ連れてもどっとったおばあさんに言うたんじゃそうな。

「なんと、おばあさん、おばあさん。きょう難題が出て、こういうことがあったん。どうしょうかあ」

「ううん。そりゃあ、わけぁ無いことじゃあ。七曲がりの水晶の玉の穴の向こうへ蜜ぅつけて、へえで、こっちの方から、蟻んこの腰ぃ糸をつけて、向こうへ向こうへやってみい。そうすりゃあ通るけえ」

おばあさんに教えられて、そいからまあ、七曲がりの水晶の玉ぃ糸を通して、大臣に持って行ったそうな。そうしたら、

「あんたぁ、まあまあ、うみゃあことをした。この難題が解けて、国が助かったあ」

いうて、まあ、お褒めをくださったん。ほいたら、また次の難題が来たぁ。こんだぁなあ、

「灰をもって、縄ぁなえ」

ほいで、灰をもって縄ぁなうこたぁ、とてもできんことじゃ。せんようなら、国が立たん。灰をもって、縄ぁなうこたぁ、どうしてもできん。大勢の大臣がおっても誰じゃし（誰も）できん。ほいで、またその息子がもどって、

「おばあさん、おばあさん。『灰をもって、縄ぁなえ』いう難題が来たんじゃが、どうようにすりゃあよかろうか」

「おう、そりゃあわけぁない。盆の上へ縄を据（す）けて、それへ苦汁（にがり）うかけて、へえから火をつけてみい。けっこうな縄が、解けんように、ずうっとけっこうに焼けるけえ」

へえから、苦汁ぅ縄へかけて焼いて持って行ったら、

「まあ、こりゃあ、うまいことをしたあ」

また、お褒めを受けた。

へえからこんど、また難題が来たぁ。こんだぁ、

これができんようなら、国が倒れるたらどうたらいうて。それは四角な漆塗りの棒じゃったそうな。
「四角な漆塗りの棒の、どっちが頭かしまえか、元か先かいうことを、印ぃつけておけえ」
へえでまあ、せえじゃあまた、もう一つおばあさんに去んで話さにゃあいけん。
おばあさんにそういうて話したところが、おばあさんが、
「そりゃあわけぁ無あ。こりゃあ川へ流してみい。そうすりゃあ、元の方が先ぃ流れるけえ。へえで、てんま（梢）の方があとから流れる。こうようにしてみい」
いうて、そうしたら、また、うまいしこうできたそうな。そうしたら、役人が言うてんことに、
「あんたぁ、どういうわけで、こうようんことを、その場で言わざったら。どういうわけか」
そいて、息子は両手をこうそろえて、前へ出してなあ、
「どうぞわしぅ罪にしてくれえ。どうにもしてくれえ。実は、わしが悪かったんじゃ。お母さんを捨てりゃあ良えのに、どうしても辛うて、よう捨てなんだんじゃけえ。その罰じゃけえ、どうぞ罪にしてくれえ。実は、わしゃぁお母さんをよう山へ捨てずに、家ぃ連れて去んで隠いとるんじゃ。そのお母さんに問うて、難題ぅ解いてもらいよった。ありゃあ、わしがの知恵じゃあ無あんじゃ」
へえから、年寄ぅ大事にせにゃあいけんいうことんなって、年寄ぅ山へ捨てるいうこたぁ絶対せんようになったんじゃそうな。
ひとむかしこっぽり。

伝承世界

「幸せな姥捨山伝承」〈エッセイ誌「R〉より転載、読者感想文 付〉

勤務先の大学では学外公開講座「尾道文学談話会」を毎年開催しています。木村大刀子さんには講師をお願いした年があり、そのご縁から「昔話のこぼれ話でも…」と本誌寄稿へのお声がけをいただきました。講座内容は毎年刊行する『尾道文学談話会会報』にまとめ、インターネットでも広島県大学共同リポジトリ（HARP）からご覧いただけるのですが、確かにそこからこぼれてしまっている内容もあります。
平成25年6月6日の文学談話会では「姥捨山伝承

のいろいろ」というテーマでお話しましたが、事前の広報段階で同僚から驚きの声が寄せられました。

（同僚）「談話会にそのテーマは大丈夫？」

（私）「なぜ？」

（同僚）「参加者は高齢者が多いから…」

不幸な高齢者の話を高齢者相手に話すのか…という心配からだったようです。なるほど大学生相手の授業では考えもしなかった点で、言われてみればそのような印象を与える話ではあります。しかし、姥捨山をめぐるたくさんの伝承話は見事にそれを裏切ってくれます。

文字資料では平安時代の歌物語『大和物語』に、嫁の希望から養母をいったん捨てたものの一晩中眠れず、その思いを歌に詠みあとで迎えに行く男の話があります。

わが心なぐさめかねつ更級（さらしな）や
　姨捨山（をばすてやま）に照（て）る月を見て

養母への思いを断ち切ることができず、捨てることなど「堪えられない」「我慢できない」と詠んだ歌は、これ以前にも『古今和歌集』に収められていましたが、同話は平安時代末期に成立した説話文学の巨頭『今昔物語集』にも享受されました。興味深いことに『今昔物語集』には三つの姥捨山伝承が紹介されています。一つは巻30ノ9「信濃国の姨棄山の語」、つまり『大和物語』と同話の本朝部（日本）の説話ですが、そこに到るまでの天竺部（インド）と震旦部（中国）にも類話を掲載しています。

まず、天竺の話は巻5ノ32「七十に余る人を他国に流し遣りし国の語」に以下の内容が紹介されます。

母が七十歳を過ぎた頃に大臣である息子は、
　朝（あした）に見て夕（ゆうべ）に見ぬそら尚不審（なほおぼつかな）さ堪（た）へ難（がた）し。何（いか）に
　況（いわ）んや、遙（はる）かなる国に流し遣（や）りて永く見ざらむ
事、更（さら）に堪（た）ふべきにあらず

（少しの間でも顔を見ないのは堪えがたいことなのに、遠くの国に追いやって長い期間会えないのはもっと我慢できないことだ）

と特別な部屋を作り、家族にも秘密にして老母を隠し続けました。あるとき他国から無理難題が寄せられ、解き明かさなければ国が滅ぼされるという危機が迫ります。難題は3問で、①馬の親子の判別（子が残した物を食べる親）、②木の根元と先の判別（水に流して沈むのが根元）、③象の重さの計量（同量の石で計量する、アルキメデスの原理）でした。

この国難を救ったのは大臣であった息子ではなく、難題解決の知恵を授けた老母でした。頭脳明晰な者の存在を知った敵国は退散し、大臣の涙の告白で老人の知恵知識の大切さを知った国王は遠国に追いやった人々を呼び戻して法律を改め、国名も「棄老国」から「養老国」に改名したという話です。

本話の出典はおよそ2世紀頃に成立した仏典『雑宝蔵経』と推測されます。そこでは蛇の雄雌を判別する難題まで含まれており、教義をめぐり繰り返される問答が国を問わず後世好まれて引用されたことが分かります。

次に、震旦の話は巻9ノ45「震旦の厚谷、父を謀りて不孝を止めたる語」でした。厚谷という名の男の子が、父親と一緒に祖父を山に捨てに行きます。祖父を山に置いて帰ろうとするとき、厚谷が祖父を運んできた輿（籠）を持ち帰ろうとするので父親はその理由を尋ねます。厚谷は「いずれ自分も父親を捨てに来るので、わざわざ新しい物を作るよりはこれを使った方が良い」と告げて棄老を思い止まらせた話で、子の賢さを伝えます。これは中国から日本に伝わる孝子伝の類話ですが、やはり平安時代以降の童蒙教訓書や仏教説話集にも好んで引用されました。

『今昔物語集』が天竺、震旦、本朝という三国におよぶ話として好んで掲載したように、清少納言の『枕草子』には四十歳で棄てなければならないとされた親を七十歳まで隠し続けた中将が神格化され、蟻通明神となった由来話も紹介されています。

また、軍記物『曽我物語』では山に運ばれる際に枝を折って道標を残し、息子の無事な下山を祈った老母の歌として、

奥山にしほるしおりは誰かためそ
　我が身をわけて生める子のため

と枝折山の地名由来話が紹介されています。以上はごく一部ですが、このような形で日本の文献資料にはたくさんの姥捨山伝承が残されています。

そして、本話をめぐっては言い伝えの文芸（昔話や伝説）の報告が多いのも特徴です。棄老の場所を確実に語る伝説も多いのですが、そのほかに場所を明かさない昔話だけでも総数1387話が報告されています。そして、これらはおよそ四つの話型、つまり①枝折り型（息子の下山の道標を作る母）746話、②畚型（籠を持ち帰ろうとする孫）196話、③難題型（老人の知恵は宝）878話、④福運型（捨てられた山で鬼

から打出小槌を入手）25話に分類されています。

物語の祖と呼ばれた『竹取物語』に限らず、難題は物語を構成する魅力的な要素の一つでした。機知に富んだ内容は聞き手を喜ばすだけでなく、語り手にとっても楽しい昔語りの場を生み出すきっかけになったのでしょう。灰で縄を編む、打たぬ太鼓に鳴る太鼓など、優れた語り手が生み出す難題話は姥捨山伝承に限らず昔話の世界を充実させていきました。

興味深いことに、海外の昔話には「かくまわれた老人の知恵が王国を救う」という難題型や、祖父・父・孫に受け継がれる「半分の絨毯」という畚型があります。この点に注目すると『今昔物語集』や『枕草子』の難題型や、『曽我物語』の畚型は大陸伝来型とも言えましょう。イソップ寓話や紀元前のパピルスの断簡にも類話が残されており、難題型が世界的に散見する点は棄老説話の古さを推測させ、シルクロードが物語を伝える道であったことを今さらながら気づかせてくれます。

さて、そうなると海外の報告にない①枝折り型や④福運型などは逆に日本的な伝承と言えましょう。下山する息子が道に迷わないよう枝を折り標を作る親心や、最終的に打出小槌を入手し劇的なハッピーエンドを迎える話などは、棄老説話を通して日本人が何を物語ろうとしたか、そして難題型や畚型だけでは事足りなかった日本人ならではの創造力が見え隠れします。

ところで、民俗学者の柳田国男は難題型を海外からの流入であるとし、棄老習慣の虚構についても指摘していました。つまり、姥捨山はあり得ない話で人を引きつけるための、いわば民話を語り始める際のマクラであると推測しました。もちろん、彼の著書『遠野物語』には棄老伝承と関わって高齢者だけが住む「蓮台野（れんだいの）」という土地も紹介されています。しかし、文字資料における本話の扱いが過去においても珍話であったことに注目し、本話はあくまでもフィクションであり、伝承の素地があった日本に外来の話を上手に取り入れた話に過ぎないと推測しました。あり得ない話だからこそ昔話としての面白さが増し、人々の好奇心が語りを生み広く伝播に結びついたということのようです。いずれにせよ、姥捨山伝承は現実を考えさせようとする物語の世界で、親子の情愛とともに語り継がれてきました。

さて、もとに戻ります。これまで書き継がれ語り

継がれてきた本話の多くは、結果的に「捨てることができない姥捨て話」でした。家族にも隠し続け泣きながら国王に訴えた息子、父の棄老を身をもって諌めた孫息子、息子の無事を祈り枝を折り続けた母、そして最終的に打出小槌で裕福になる親子……。

最愛の人物との別れが間近に迫ったとき、親子の強い絆と情愛は強調され、その確認をもって本話は結ばれます。ぎりぎりのところで子どもを不孝者にしない点が本話の魅力とも言えましょう。事実か虚構かは別として、棄老説話が時代や国を問わず比喩として伝承されてきたとするならば、そこに込められた問題はほかにもいろいろと考えられそうです。

ところで、冒頭の同僚に捨てることができない姥捨山伝承を紹介したところ、「談話会の参加者は親孝行できない年齢なのでは…」という意地悪な言葉で追い打ちをかけてきました。すでに退職組となった元同僚には、実現不可能な孝行話という印象が強く残ってしまったようです。４つの話型に目を向ければ単に孝行を促すだけの話ではなく、そして語り方や聞き手の立場によってもさまざまな解釈が可能なはずなのですが……。どうやら私の語り手としての能力は幸せな姥捨山伝承を語るには未熟すぎたようです。

昔話の伝承者となるには、まだまだ精進が必要みたいです。

○読者から寄せられた感想文（原文）

・心に沁みました。「姥捨山」のお話も知ってはいましたが、改めてお話を聞き、勉強になりました。私も三人の子供がいますが、親はいくつになっても、子供が幸せでいてくれることが、自分にとっても幸せのように思います。

・数ある「姥捨て山伝承」を分類、紹介して頂きました。悲しくも痛ましい話ばかりだが、日本らしく、ハッピーエンドに終わるのが常だと結論づけられてほっとする。物事が他人事の時はそんなものか！と聞き流せるが、自分も後期高齢者の中に括られるようになってみると、心穏やかには聞き流せない。捨てられそうになったお年寄りはどんな心境だったんだろう？とそちらの方に気持ちが寄る。

・藤井さんの「幸せな姥捨山伝承」を拝見して感じるのは、姥捨山伝承の中に悲劇的な要素ばかりではなく、老人に「死ぬ自由」があったのではなかっ

たか、と。深沢七郎の小説「楢山節考」からもそれを感じ取ることができます。ところが、現代の日本ではその自由は認められていない。ひょっとしたら、「死」に関しては昔の方が今より自由ではなかったか、と錯覚する時があります。

・興味深く読ませていただきました。

・今の年寄りは恵まれすぎている感がありますが、財政がゆきづまるという事態も考えられます。

・姥捨て山、「幸せ」を追求、良かったです。今様姥捨、ひとりぐらしも多い事に胸が痛みます。

・興味深く読みました。私自身、高齢者の仲間入りし、私と妻の両親４人を見送りました。長患いで苦労を掛けた親も居ましたが、皆、天寿を全うしました。柳田国男の「棄老習慣の虚構」には安心しました。むしろ現代の姥捨て山的問題が深刻です。姥捨て山老人ホームの問題、老々介護の問題、承諾殺人の問題等々。

・棄老伝説については漠然と、大昔にあった悲しい出来事だが、深刻な話だしあまり詳しく知りたくないなという感じだった。それは深沢七郎の『楢山節考』を読んだ後も変わらなかった。しかしこの作品を読んでそういう意識が一変した。そして〈社会的現実は人々の「語り」によって作られる〉という考え方について思い出した。「事実か虚構かは別として、棄老説話が時代や国を問わず比喩として伝承されてきた」こと、そして「親子の情愛とともに」語り継がれ、多くは「捨てることができない姥捨て話」であり、「ぎりぎりのところで子どもを不孝者にしない」魅力ある物語であること。目から鱗が落ちる思いだった。

・藤井佐美さんの「幸せな姥捨山伝承」は、作家村田喜代子さんの「蕨野行」を思い出しながら読みました。読後感、とても良かったです。

・藤井佐美さんの「幸せな姥捨山伝承」の題を見て、「おやっ」と思いました。「姥捨山」という言葉を聞くと、私はすぐ深沢七郎の「楢山節考」や、それを基にした緒形拳主演の映画を思い出しました。「姥捨山にどうして幸せという形容詞が付くのだろう。姥捨山って悲惨に決まっているだろうに」。しかし、読んでいくにつれて、人の情としてどうしても、年老いた親を捨てられなくて、ハッピー・エンドで終わる話を知り、私はほっとしました。また、同時に現代の社会に別の形で存在する「姥捨山」を連想します。それは老人ホームの

ことです。老人ホームに入れば三食を食べられ、あるいは寝たきりになったとしても、特別老人ホームに入ればいろんな世話をしてもらえます。しかし、それらの人々は社会の一員として生きているのではなく、普段は一般の人々には忘れられ、施設の職員以外の人にとっては、その存在が見えないようにされ、社会の片隅でひっそりと生きているように思えてなりません。老人になり、体が思うように動かなくなったり、寝たきりの状態になっても、どのように人間の尊厳を保って社会の一員として生きていくことができるのか、考えさせられました。

（以上、読者感想文）

○身近な話　参考資料

・稲田浩二監修　柴口成浩・仙田実・山内靖子編『日本の昔話23　西瀬戸内の昔話』（一九七八年、柳田國男『日本昔話名彙』一九五四年所収話紹介　広島県豊田郡豊町久比「うば捨て山」）

・磯貝勇『全国昔話資料集成5　安芸国昔話集』（一九七四年　「42爺捨山」）

・國學院大學説話研究会『芸北地方昔話集』（一九七七年　加計町杉ノ泊　「110親棄山」）

・中国放送『採訪記録　ひろしまの民話　昔話編第2集』（一九八二年　神石郡豊松村「親棄山」1，2）

【付記】

私事ですが年末に父を自宅で看取りました。今はそばに居られたことに感謝しています。このテーマを談話会でお話したのは在宅介護生活に入る直前でしたが、エッセイ誌「R」読者のご感想を拝読し、以前とは少し異なる目でテーマを振り返ることができました。貴重な機会をくださいました詩人木村大刀子様、編集並びに読者の皆様に記してお礼申し上げます。ありがとうございました。（二〇二二年一月）

―ふじい・さみ　日本文学科教授―